

有限会社大塚ファーム

※2017年3月現在

代表者名	大塚 裕樹	資本金	6百万円
設立年	1973年2月26日	売上高	116百万円(2015年2月期)
事業内容	生産(ミニトマト、ダイコン、葉物野菜)、消費者直売、加工・製造、観光・交流	経営規模	田17.04ha、畑0.96ha、生産施設13,200㎡、加工施設80㎡
従事者数	16人(うち女性9人。女性内訳:役員1人、一般職5人、常勤パート3人)		
女性活躍支援	[女性に配慮して取組んだ環境整備] 施設設備関係(休憩室・屋内・野外トイレの設置)、重労働等の業務改善		



経営概況

(有)大塚ファームは、北海道新篠津村にある18haの農地で有機農業による生産、および有機農産物を原料とした加工品等の製造・販売を行う法人である。代表の大塚裕樹氏は農場の4代目にあたり、自身の農薬アレルギーがきっかけで農薬を使用しない有機農業に転換し、1997年には野菜すべてを有機栽培に切り替えた。2009年からは、さらに有機野菜の存在意義をアピールするため、加工品の製造・販売に着手し、規格外の野菜をペーストにしたプリンやバジルドレッシング等の商品開発に取り組んでいる。

石狩平野では冬場の農業生産が難しく、季節雇用をせざるを得なかったが、加工品の製造を拡大することで、通年雇用できる体制を整えた。また札幌市へのアクセスがよく、人材確保・定着率の観点から非常に好立地であることを生かし、農の雇用事業等の公的支援も受けながら、優秀な若手農業者を積極的に正社員として採用している。

現在は役員である大塚夫妻に、男性正社員6名、女性正社員5名に常勤パートの3名、さらに繁忙期の夏季限定の非常勤パートを9名程度、外国人実習生を数名加えた規模になっている。

1. 細かな作業を得意とする女性の活用

大塚ファームの農作業は、もともと男性スタッフ中心に行っていたが、生産する農作物を力を必要としないハーブや葉物野菜・ミニトマトに移行した事に伴い、力より根気や細かな作業が持続する女性に比重をおいて採用する方針に転換した。農産物の売上の約半分を占めているミニトマトや、看板商品である有機干し芋の生産現場には多くの女性が働いており、地域にとっても貴重な雇用の場となっている。



農商工連携を始めた2009年頃に5,930万円だった売上は、代表の妻である早苗氏が経営参画後、加工品開発やブランド戦略に注力したことから、2015年には11,700万円に到達した。自社ハーブを使用し、開発の段階から女性社員らが関わった「バジルドレッシング」は、発売当初、年間2,000本の販売を目標としていたが、半年間で3,000本を完売し、農場のブランディングやイメージアップに確実に貢献している。

2. 仕事ぶりを見て適材適所の配置を

有機農家として高い栽培技術と、100%契約栽培で販路を確立してきた経営手腕を持つ裕樹氏、そして10年間の会社員生活で培った営業・経理の経験から、企業との商談に成果を上げてきた妻の早苗氏。お互いの強みを生かし、栽培現場と経営全体は裕樹氏、営業と事務は早苗氏が担当する分業スタイルを構築してきた。

そのノウハウは、社員の配置にも生かされている。社員は各自、「ハーブ担当」「イモ類担当」「施設担当」「加工場担当」等の担当を任されており、商談の際には若い女性社員を同行させる。これらは仕事ぶりや特性をよく観察し評価したうえで、担当を決めており、男女分け隔てなく平等に扱われる組織作りを目指している。

また、月2回開催するスタッフミーティングでは、各担当者から作業場の問題点を聞き取るほか、売上や取引先との状況を報告するなど、組織全体での情報の共有や課題解決にも努めている。

3. 子育て・出産に係わる制度

産休・育休の制度を準備しているものの、実際に活用する社員はこれまで出ていない。

パート社員には、早苗氏の妹や札幌近郊に住む女性を6名雇用しており、10年以上勤務する社

員も含まれる。現在は月1回程度の出勤にとどまっているパート社員もあり、子供の小さい間は育児優先で無理のない勤務体制が可能な職場環境となっている。子育て中ゆえに発生する不測の欠勤については随時対応し、いずれ子育てが落ち着いた際は出勤日を増やせる体制をとっている。

4. ソフト&ハードでの環境整備

ソフト面では、法人として社会保険制度を整備している点で求人サイトでの訴求力が高く、有能な社員の雇用に繋がっている。また、年に1度の道内研修、2年に1度の道外視察研修に参加しており、先進的な農家や企業から学ぶ機会、さらには交流の機会の場を設けている。

ハード面では、新しく作業場兼休憩・滞在施設を整え、トイレ（洗浄機能付）や休憩スペース、ロッカーを完備している。そのほか、立ち仕事が多い選果作業では、足元に疲労軽減マットを置き、足腰への負担や冷えを防止するなど、小さな改善事項を日々発見・抽出しながら、快適な職場環境の提供に心を砕いている。

審査委員の声

大塚裕樹社長が築き上げた有機農業の生産基盤を、早苗夫人がうまく加工・販売へと乗せていくなど夫婦のしなやかなパートナーシップが印象に残る。女性スタッフの意見を取り入れた各種加工品の商品力は秀逸で、ドレッシングやスープといったものから、ペットの健康を気遣う飼い主のために有機原料をつかったドッグフードを開発するなど商品開発における創意工夫が際立つ。加工品づくりには障がい者も関わっており、まさにダイバーシティを実践する農場である。